



文部科学省と国立大学附置研究所・センター 個別定例ランチミーティング

第85回 東北大学 東北アジア研究センター (2024.6.14)

- | | |
|--------------------|--|
| 12:05 – 12:10(5分) | : 研究所・センターの概要 |
| 12:10 – 12:25(15分) | : 人類史研究の枠組みとエコシステムを
作りかえる 田村光平
戦争記憶 中国でのオーラルヒスト
リー調査から 石井 弓 |
| 12:25 – 12:45(20分) | : 質疑応答 |

東北大学 東北アジア研究センター

2024/6/14

文科省、附置研センター ランチミーティング



センターについて

- 1996年、学内共同利用研究施設として設置（独立部局）
- ロシア・モンゴル・中国・朝鮮半島を対象として日本との関係で把握
- 文理融合を含む学際的研究を推進：
 - （1）自然史・人類史（2）大国統治と民族的多様性（3）環境問題・移民
- 教員数 24名（特任含）；学術研究員 5名
- 寄附部門（上廣歴史資料学研究部門）



外部資金

年度	運営交付金	外部資金
2022	77.8%	22.2%
2017	76.3%	23.7%
2012	73.5%	26.5%
2007	80.8%	19.2%

	基盤A	基盤B	基盤C	若手	挑戦的萌芽	国際共同研究強化(B)	特別研究員奨励費	研究成果公開促進費(学術図書)	研究成果公開促進費(データベース)	学術変革領域研究(A)公募	受託研究	受託事業	共同研究	合計
2023	1	3	9	3	1	1	4				2	1	2	27
2022		4	6	5	1	1	3				3	1	2	26
2021		4	6	7	1	1	4	1		1	3	1	2	31
2020		4	10	4	2	1	4	1	1		4	1	2	34
2019		7	11	4	1	1	4	1	1		4	1	2	37

2024年度 科研費 基盤A - 2件採択

受託研究2件：文科省補助事業 北極域研究加速プロジェクト他； 受託事業1件 人間文化研究機構

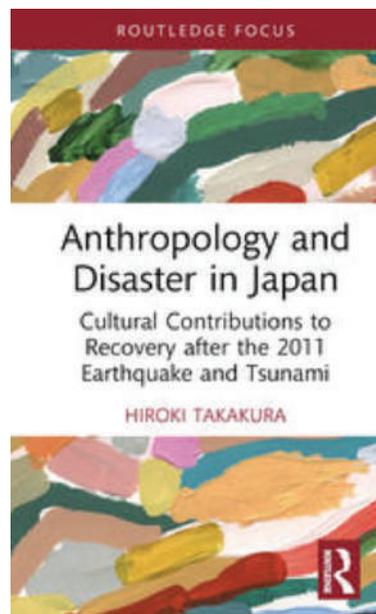
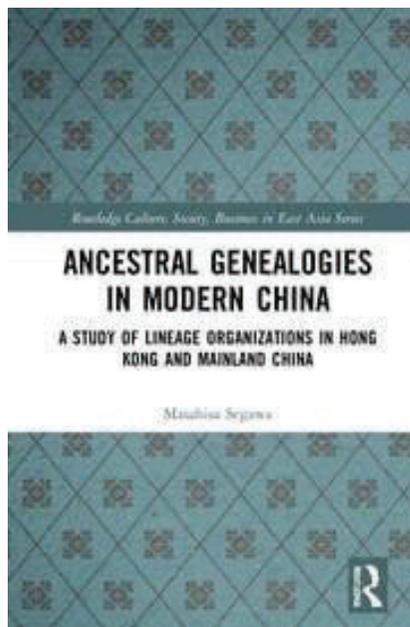
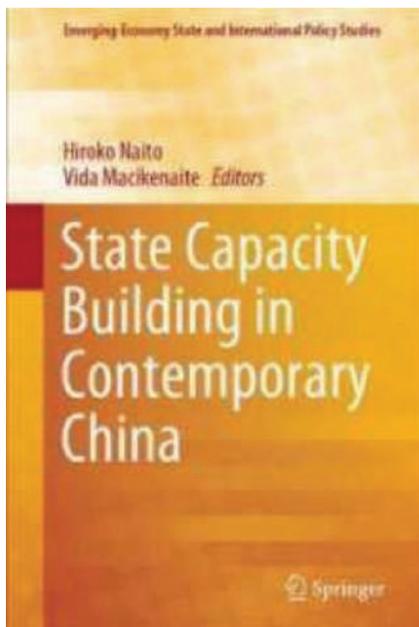
文系教員16名		業績	
	2019-2023年平均	一人あたり／年	
SCOPUS所収論文	6.8	0.52	
TOP10%	2.2	0.17	
図書（単著・編著；分 担執筆含まず）	7	0.54	

成果

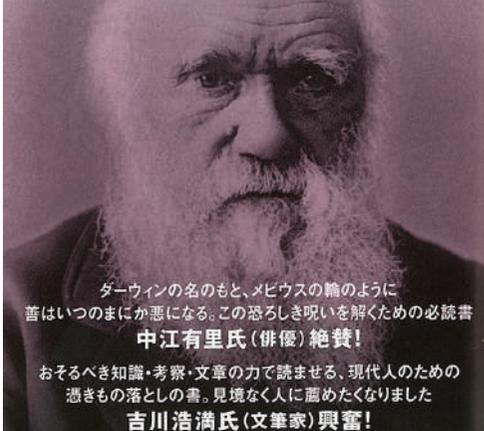
文系教員－3本に一本でト
ップ10%－極めて国際的に
競争力ある文系教員の存在

海外出版社から学術図書刊
行（2019；2021；2023）

Publons Peer Review
Awards 2019; 2018受賞－国
際的に活躍する理系教員



人類が魅入られた 進化論の「迷宮」



BLUE BACKS

進化のからくり

現代のダーウィンたちの物語

千葉聡
Chiba Satoshi



社会への波及効果-総合 力のある理系研究者

- ❑ 千葉聡「歌うカタツムリ」(岩波書店、2017年) 第71回毎日出版文化賞受賞 (2023年には中国訳; 人民邮电出版社)
- ❑ 千葉聡「招かれた天敵」千葉, 聡、みすず書房 2023年
- ❑ 千葉聡「進化のからくり 現代のダーウィンたちの物語」ブルーバックス、2020年
- ❑ 千葉聡「ダーウィンの呪い」講談社現代新書、2023年
- ❑ 辻森樹監修「一家に一枚日本列島7億年ポスター」(全国小中高配布)
- ❑ 辻森樹監修「地球史マップ」日経ナショナルジオグラフィック、2024年



研究領域	期 間	研究タイ
(A) 環境問題と自然災害	2023-2025	鳴子火山火口湖・潟沼の火山活動調査
	2023-2027	災害時における障害者の脆弱性の研究
(C) 移民・物流・文化交流の動態	2022-2023	歴史資料学の実践 — 福島県須賀川市における地域
	2023-2024	更新世末から完新世初頭における環日本海の人類の
	2022-2023	ホモ・サピエンスの東北アジアへの拡散と文化的
	2023-2024	東北アジアの先史時代移行期における人類の行動
	2021-2024	東北大学狩野文庫所蔵朝鮮通信使関係資料の基礎
	2022-2023	在日外国人の社会統合と地理的要因との関連
	2022-2023	地域間交流と農業の持続可能性に関する文化人類
(D) 自然・文化遺産の保全と継承	2023-2023	ミスジマイマイ種群の遺伝的構造の解明
	2023-2023	「CNEASモンゴル地質試料コレクション(CNEAS-M
	2023-2024	道東太平洋岸の地質基盤が支える独特な地形・気
	2023-2025	近世東北アジアの交流と情報
	2022-2023	仙台藩における支配機構と政策決定の総合的研究
(E) 紛争と共生をめぐる歴史と政治	2023-2026	戦争記憶の国際的比較研究
	2023-2024	清代モンゴル社会における自生的秩序生成に関する
	2023-2025	ウクライナ侵攻後のロシアからの大量出国とモン

共同研究

- センター長裁量経費を用いて所内の研究者を代表とする共同研究（1-3年、年度予算30万程度）を公募。
- 学内共同利用施設として、学内教員との連携
- 現在一学内兼務教員9名＋クロアポ1名

学外との共同研究・国際展開

- 国内連携
 - 科研費プロジェクトによる分担者
 - 文科省補助事業 北極域研究加速プロジェクト（2020-2024）－国立極地研等との連携
 - 人間文化研究機構－東ユーラシア研究プロジェクト（2023-2027）－北海道大学・国立民族学博物館・神戸大学と連携して研究拠点
- 海外連携
 - **European Research Council (ERC)** 「SUCCESS - The earliest migration of Homo sapiens in southern Europe」：2017-2022；イタリア・考古学
 - UK Economic and Social Research Council- The political ecology of coastal societies: 2019-2020：イギリス・人類学
 - **European Union Horizon 2020** project: Preserving and Sustainably Governing Cultural Heritage and Landscapes in European Coastal and Maritime Regions (～2022) EU・人類学・政策科学
 - 漁業に関する科学技術及び経済欧州委員会（STECF）－国際科学ワーキング助言グループ（2019-23）
 - ラップランド大学北極センター外部評価委員会（2020-2023）
- センター組織
 - センター内外国人割合 21%
 - 外国人研究員公募 常時2名（2023年度倍率-約2倍）

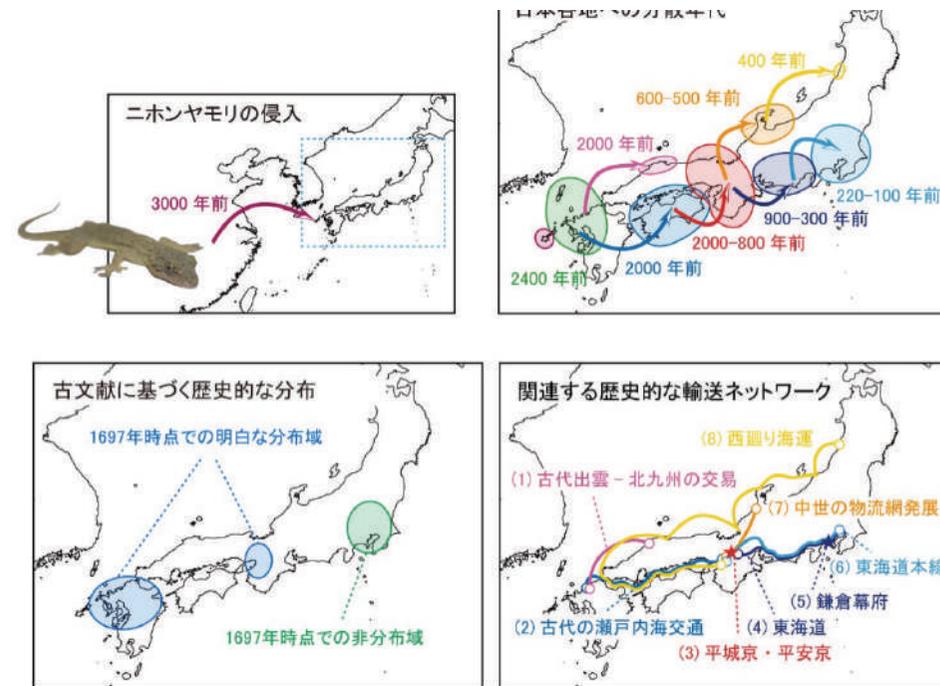


図 3. 集団遺伝学的に推定したニホンヤモリの各地域への進出年代(上)と人文史的観点との対応

異分野融合研究 生物学 + 日本史

- ニホンヤモリは外来種だった！ 遺伝子と古文書で解明したヤモリと人の3千年史
- 2022年11月30日の米国科学誌PNAS Nexus掲載
- DOI : 10.1093/pnasnexus/pgac245



異分野融合研究 考古学 + 古生物学

- ネアンデルタール人絶滅の謎の解明に手がかり —ヨーロッパ最初のホモ・サピエンスの投射技術の解明—
- Nature Ecology and Evolution誌に掲載、写真が表紙の掲載
- DOI: 10.1038/s41559-019-0990-3

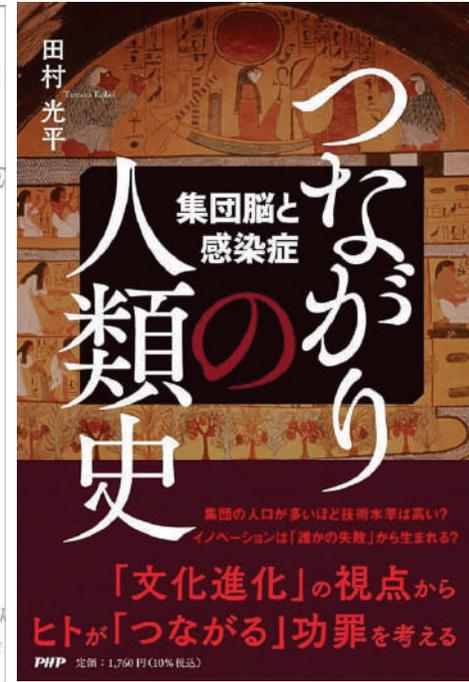
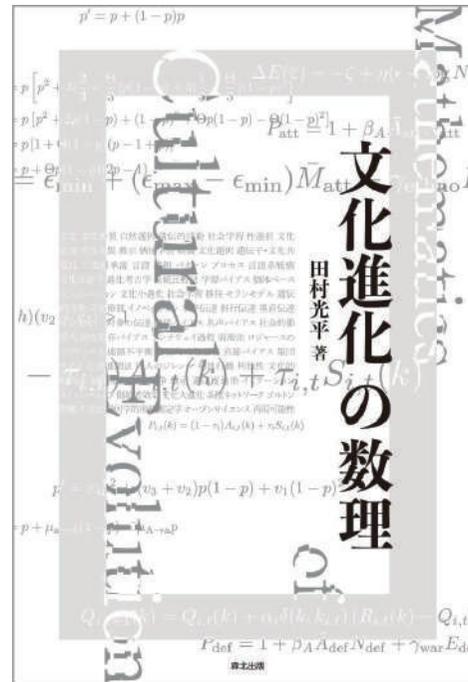
2024.06.14@文科省ランチミーティング

人類史研究の枠組みとエコシステムを つくりかえる

田村光平

東北大学 東北アジア研究センター・環境科学研究科・統合日本学センター

- 2004～2008 名古屋大学情報文化学部
複雑系科学
- 2008～2013+2014 東京大学大学院理学系研究科
自然人類学
- 2014～2015 東京大学大学院情報理工学系研究科
データサイエンス
- 2015～2016 ブリストル大学
データサイエンス
- 2016～2023 東北大学学際科学フロンティア研究所
人類史+データサイエンス
- 2023～現在 東北大学東北アジア研究センター
人類史+データサイエンス



科学技術人材育成のためのコンソーシアム受託研究

「大学の社会貢献」報告書

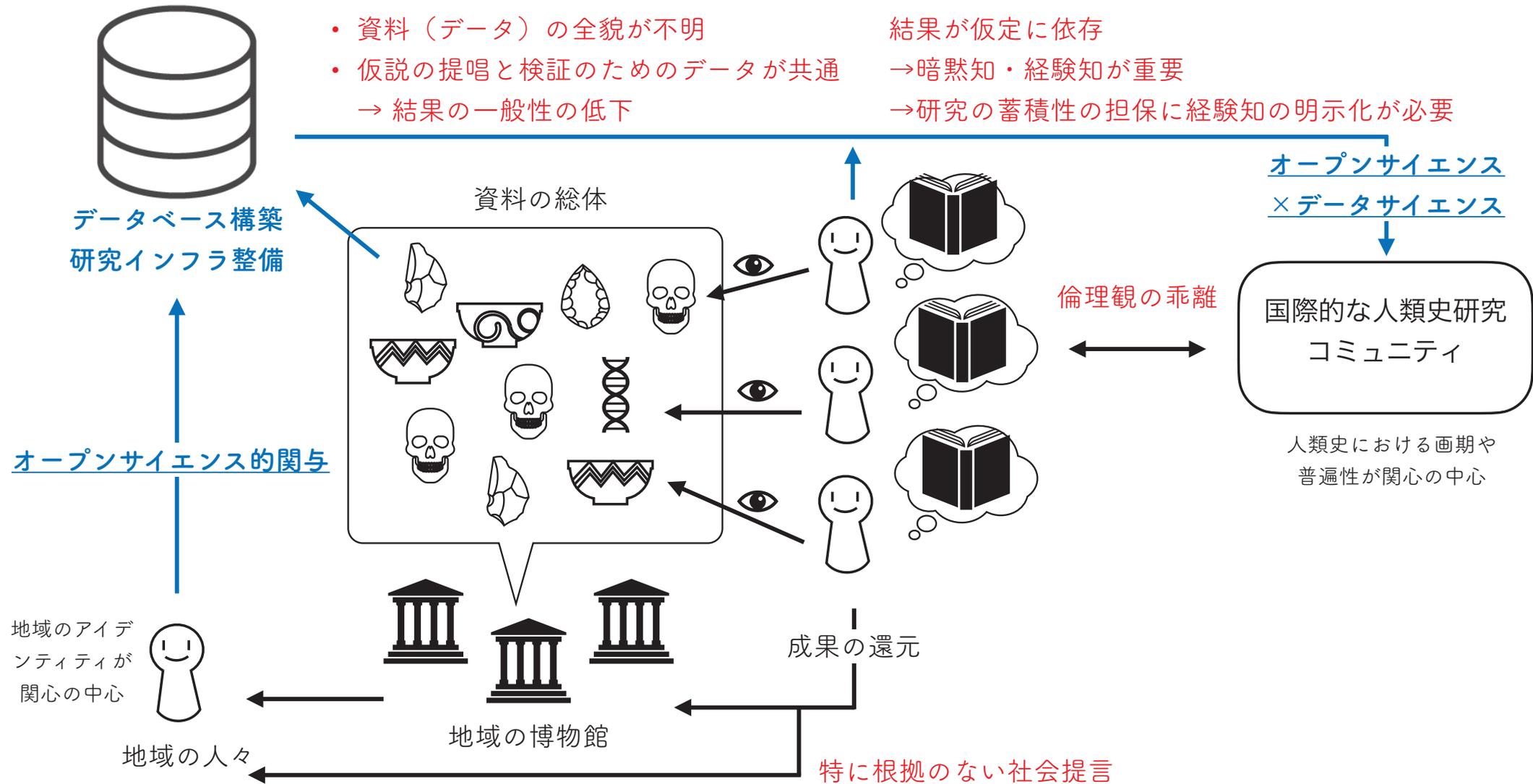
2019年5月

北海道大学・東北大学・名古屋大学

人類史の研究：人間観の基礎

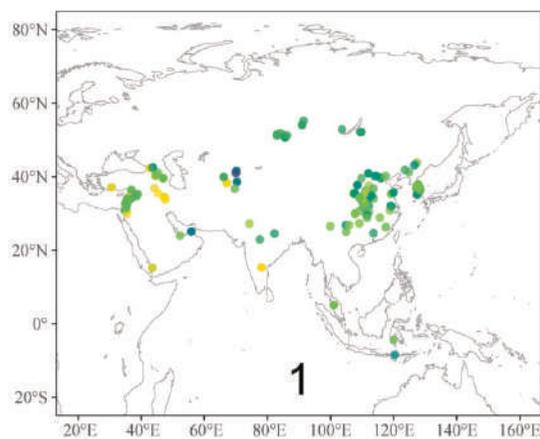
- 市民から政策決定者までの人間観への影響
- 副次的な影響として
 - 過去の植民主義・人種主義の精算
 - 法医鑑定
 - 文化財の価値づけ
- 課題
 - 「定説」がよく覆る
 - QRPの横行（構造的に不可避な面も）
 - 専門家の減少、地域コミュニティの消滅

人類史研究の枠組みとエコシステムをつくりかえる

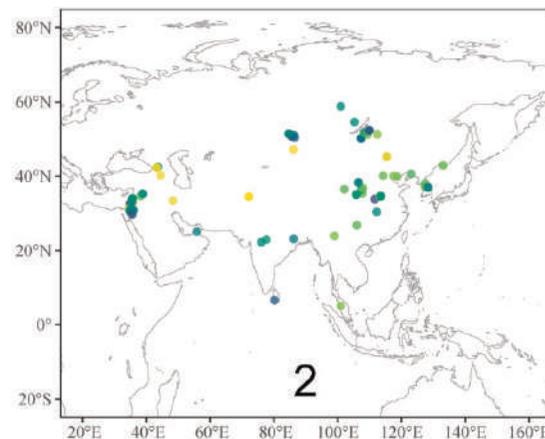


考古学データの定量的解析

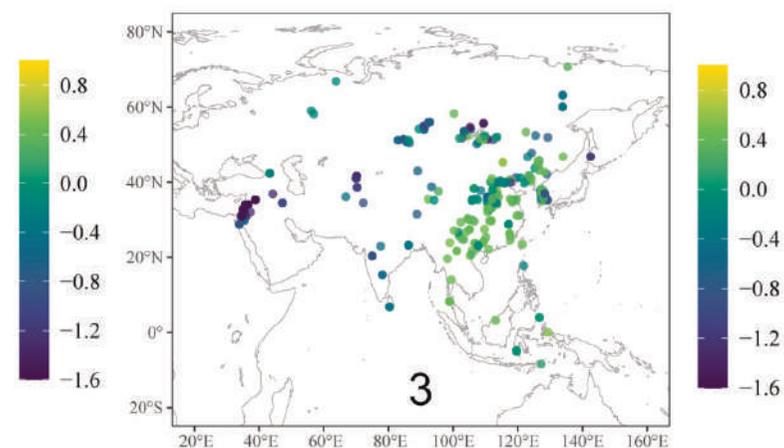
Period1 (130-48 ka)



Period2 (48-40 ka)



Period3 (40-20 ka)

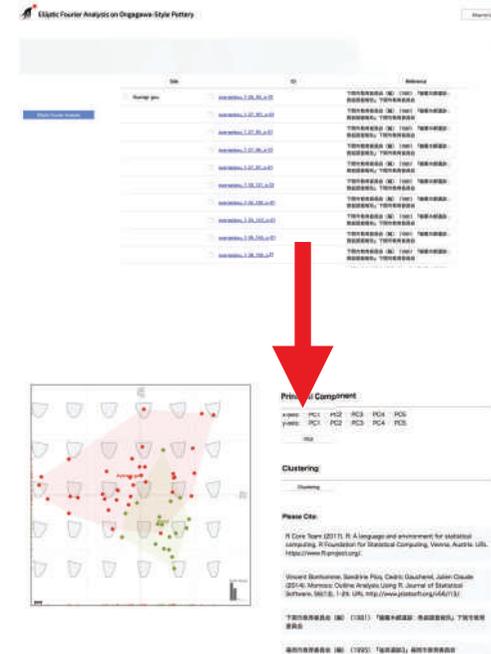
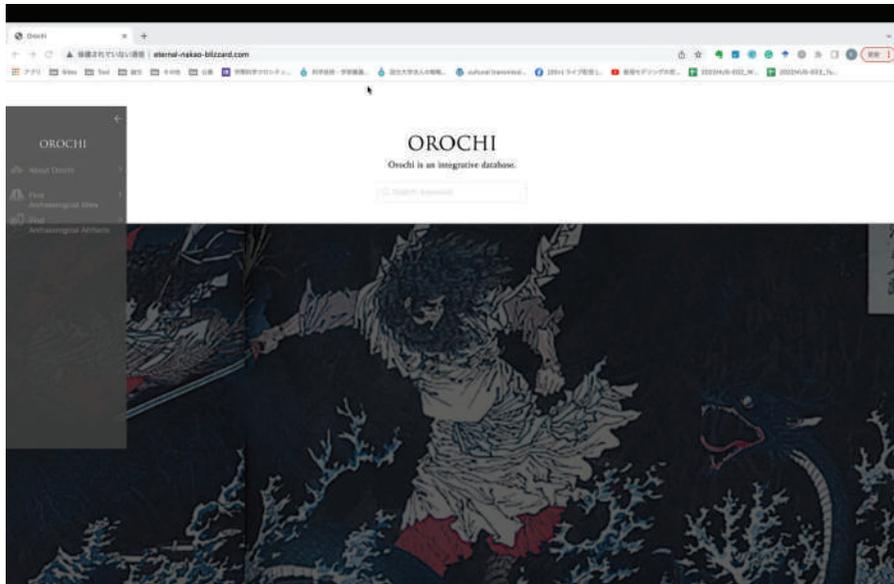


Nishiaki, Tamura et al. (2021)

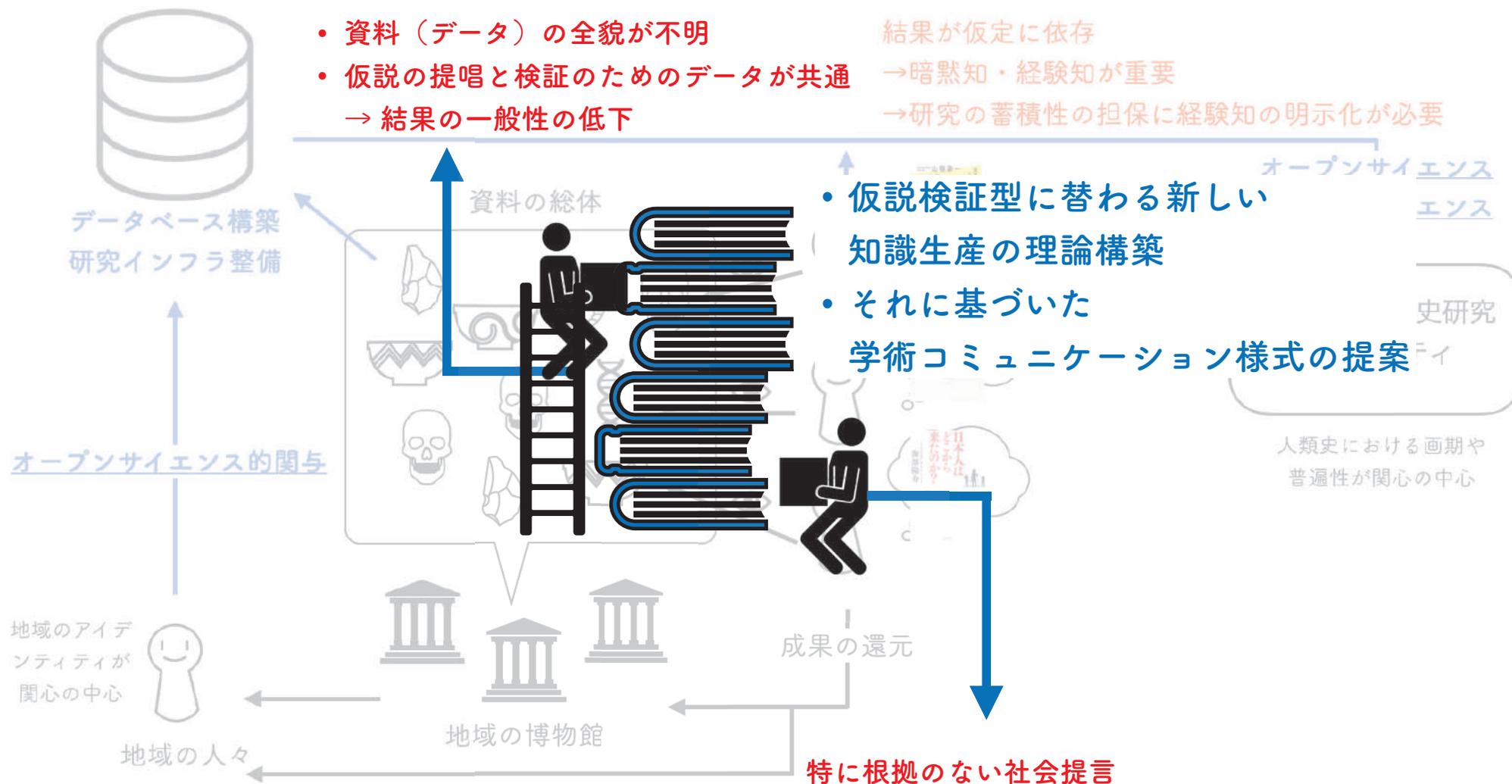
オープンサイエンスと「創造のためのミュージアム」

「（みんぱくについて）市民のまえに公開されているからといっても、わたしはこれを、かならずしも大衆を啓蒙するための機関とはかんがえていない。大衆は、啓蒙されるために存在するのではない。今日の大衆は、そのまま、市民大学において**学習と研究をおこなうことのできる「研究者」**なのである。現代の博物館は、啓蒙されるべき大衆よりは、研究意欲にもえた市民を対象として考えるべきであろう。」

『梅棹忠夫著作集 第15巻』p.136



課題と今後の展望





戦争記憶
中国でのオーラルヒストリー調査から

2024年6月14日
石井 弓

研究の背景

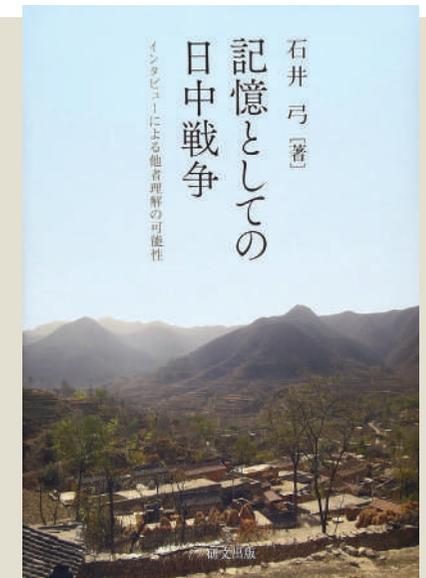
<経験>

- 1999年 北京大学留学→戦争記憶と遭遇
- 2007～15年 東京大学特任教員→文理融合
- 2018～20年 オックスフォード大学訪問研究→英語圏の研究を吸収

<現実的問題>

- ロシアによるウクライナ侵攻
- イスラエルによるガザ攻撃
- 世界情勢が協調から対立へ

⇒紛争の帰結であり、新たな対立の起源ともなる戦争記憶を解明する



問題意識

戦後世代（非体験者）がいかに関戦記憶を内面化するのか

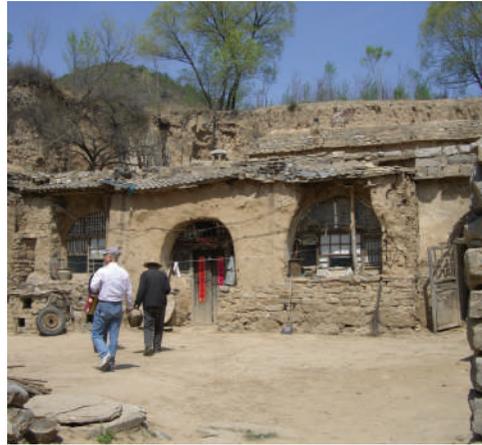
- 個人の記憶→集団の記憶への契機
- 戦争記憶の世代間継承

感情記憶（2000年、孫歌）への理解

- 中国の社会背景への理解
- 政治性や社会性を内面化した「主体的な記憶」とは

「集合的記憶」（記憶は社会的な構成物）をアジアから問い直す

- 記憶する主体の感覚を拾い上げる
- 歴史と記憶を、中国農村から考える



オーラル・ヒストリー調査

- 中国山西省孟県（日中戦争の最前線）
- 42村、太原市、孟県城、300名以上の聞き取り

<歴史背景>

1945年～対日協力者の粛清

1950年代～政治思想教育運動（憶苦思甜）

1966年～文化大革命、社会主義の集団化政策

1978年～改革開放

<戦争を伝える媒体>

- 戦後の社会環境（集団農業、露天映画）
- 口頭でのお喋り（順口溜）
- 夢による追体験（トラウマ記憶の継承）

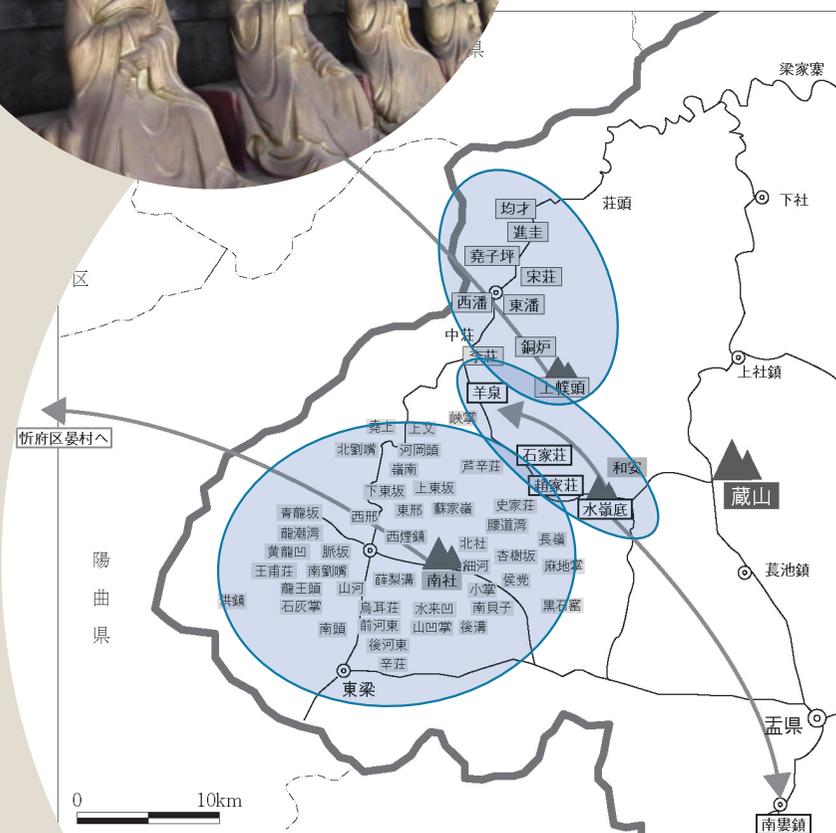
発見と新たな問い

＜農村のコスモロジーと記憶＞

- 「順口溜（シュンコウリュウ）」
- 雨乞いの復活（1980年代～）

＜和解は如何に可能か＞

- 日本（加害者）×中国（被害者）
- 自己変容による他者理解→中国側も変わる必要がある（和解）
- 歴史学における主体の問題



今後の展望

- 戦争記憶の国際比較（共同研究、2023年～）
 - 精神医学と歴史学の融合（V・Volkan）
 - アジアにおける和解の追求
 - 災害記憶と戦争記憶の関連
- * 中国での調査の可能性が今後の鍵となる

